

## 遠く離れたふたつの国を結ぶ中世

マリア・ジュゼッピーナ・ムツァレツリ 著  
伊藤 亜紀 訳

私は日本での中世イタリアに関する知識、あるいはイタリアでの中世日本に関する知識の一般的な性質をお話しするつもりはないし、また歴史研究の分野における互いの影響を考えようとしているのでもありません。要はここ3、40年のあいだに、歴史、それもとりわけ中世史のおかげで、イタリアと日本が結びつくことになったという事例を数件、ご紹介したいだけなのです。つまりこのささやかな出会い——しかし私にとっては非常に大切な出会いを思い起こしながら、ボローニャに来て、この大学と重要な関わりをもつことになった日本やイタリアの研究者たちとの一連の繋がりを考えていきます。このことは記憶を呼び起こし、学術面だけではなく、私が個人的に大切だと感じる関係を維持し、また強めることにもなるでしょう。中世史家のおこなう復元という作業が、中世史に基づくのは当然のことですが、他の多くの分野でも、昔から今日に至るまでボローニャ大学の関わってきた共同研究の成果が上がっているという事実を、私はよく知っています。

最初に強調しておきたいのは、日本人の中世研究者がイタリアに興味をもつのが比較的遅かったとすると、ボローニャに対する関心はなおさらだったということです。中世イタリアを専門とした最初の研究者のひとりが星野秀利先生ですが、その功績は、日本の研究者にボローニャ、そしてボローニャの中世研究者へと目を向けさせたことにもあります。

1962年、星野先生は、イタリア政府給費留学生としてイタリアにいらっ

しゃいました。新しい学問分野や国際関係に詳しいオヴィデオ・カピターニ先生によれば、ボローニャ大学の歴史学講座開設にあたり、星野先生は1976年に「商業及び航海史」の教員として招聘されています。当時フィレンツェに居を構え、経済史、特に同業組合と毛織物工業史を専門となさっていた先生は、他の日本の中世史研究者同様、ボローニャではなくフィレンツェやヴェネツィアに非常に通じた方でしたが、1991年1月25日に亡くなるまで、この街で教鞭をおとりになりました。したがってボローニャと日本の中世研究者たちとが交流するようになった当初から、経済史、厳密に言えば手工業生産の歴史、そしてその専門家が存在し、古文書の緻密で根気のいる作業に、共に関心を抱いてきたのです。

1990-91年度に、星野先生の「商業及び航海史」を、私が引き継ぐことになりましたが、これが私の最初の担当科目です。このようなことになったのは、それまで私が専門としてきたのは「航海」ではなく「金融取引」だったからです。そして先生と私は、チェントトレチェント通りにある古文書学・中世学研究所で、同僚として良好な関係を築いてきましたので、このことをたいへん嬉しく思いました。

齊藤寛海先生が日本文化会館の年報に寄せた星野先生の追悼文によりますと、先生のご研究は「当時、日本の研究者たちの大半が陥った教条主義の影響を受けておらず、専ら同業組合や地所の所有権に関わる史料に立脚したものでした」<sup>1)</sup>。この年報には、星野先生による毛織物工業史やフィレンツェ経済史関連の論文が数多く載せられていますが、これらは1980年に『中世後期フィレンツェ毛織物工業 13-15世紀フィレンツェの毛織物取引とフィレンツェ織物市場』と題して、オルシュキ社から出版されました。

---

1) この追悼文は、下記に掲載されている。Istituto Giapponese di Cultura, The Japan Foundation, *Annuario*, XXIV, 1990-1991, Roma 1991, pp.107-108. 続く109-111頁には、ジュゼッペ・ソルジェ先生と齊藤先生によって作成された星野先生の著作目録、105-106頁にはカピターニ先生による追悼文がある。

た<sup>2)</sup>。これはきわめて重要な書であり、今日に至るまでこれを超越の研究はありません。またフランコ・フランチェスキは、1994年に発表した「星野先生の思い出」において、先生が最晩年に、フィレンツェやトスカーナ以外のさまざまな地域、つまりアブルッツォやレヴァンテ等、フィレンツェと深い関わりのある土地、そしてその織物業に、どのように注目していたかを記録し、まとめています<sup>3)</sup>。

経済関係は常に人びとの関心を引き起こしますが、これが経済倫理という革新的な分野にまで拡大したおかげで、1994年3月には大黒俊二先生がボローニャを訪れることになりました。これが今日まで続く我々のコラボレーションの始まりです。先生がこの街にいらしたのは、本学のカピターニ先生が1974年に刊行した『中世経済倫理学』——これは長年の研究成果として、成功をおさめた書です——で、一章分がモンテ・デイ・ピエタにあてられていたからです<sup>4)</sup>。先生は1969-70年度に哲学科の学生を対象におこなった授業のなかで、この本の構想を練っておられましたが、当時私はそれに通っていたおかげで、モンテ・デイ・ピエタの歴史に触れて調査を進め、1973年7月にこのテーマで卒論を提出することができました。以来、私はモンテ・デイ・ピエタの研究を続けていますが、大黒先生の招聘で、日本でも発表をおこなっています。大黒先生もまた、ボローニャ・ラヴェンナ地区のモンテ財団の基で活動するモンテ・デイ・ピエタ及び連帯貸付研究所の協力を得て、2013年3月26日に「質屋——日本近代史における民間担保貸付」と題する講演をおこないました（ちなみに質屋とは、16世紀から1960年代まで存在した担保貸しの店のことです<sup>5)</sup>。これは、イ

---

2) 邦訳は、星野秀利『中世後期フィレンツェ毛織物工業史』齊藤寛海訳、名古屋大学出版会、1995年。

3) Franco Franceschi, "Ricordo di Hidetoshi Hoshino. Le ultime ricerche", *Archivio storico italiano*, CLII, 1994, pp.425-432.

4) Ovidio Capitani, *L'etica economica medievale*, il Mulino, Bologna, 1974.

5) Shunji Ooguro, "Shichiya. Prestito popolare su pegno nella storia moderna giapponese", Centro Studi sui Monti di Pietà e sul Credito Solidaristico,

タリア国内でさえ知られていない特殊な制度の変遷を世に知らしめる絶好の機会でした。2015年8月に京都で開かれた世界経済史会議のセッションで、ボローニャ大学のマウロ・カルポーニ先生と大黒先生は、異なる時代や文化的状況でみられる担保の信用貸付を比較しましたが<sup>6)</sup>、これは昔からの複数の縁が絡みあって生まれたコラボレーションです。

そうこうするうちに中世史の別のテーマ、とりわけ社会史と心性史に対して、私たちも日本人も興味を抱くようになったことから、別の縁が生じました。私は説教史に特に関心があり、このテーマについては、2005年に上梓した『人間を釣る漁師——中世末期の説教師と広場』を基にして<sup>7)</sup>、日本で講演しています。2010年9月27日から28日にかけて、ボローニャで説教の成果に関する国際会議が開催されたさい、私は特にフランチェスコ会厳修派の働き、さらには奢侈禁止令公布の原因となる贅沢や虚飾を戒める説教が、モンテ・デイ・ピエタを設立させたということ考察しましたが、大黒先生は「耳から手、手から心へ——15世紀フィレンツェにおける説教の筆録と内面化」と題して発表をおこないました。この会議では、先生の教え子である木村容子さんも「15世紀イタリア都市における平和説教——ベルナルディーノ・ダ・フェルトレ」というタイトルで発表しており、これらは2014年にブレポールから刊行された講演録に載せられています<sup>8)</sup>。面白いことに、新しいテーマが入ってきて発展し、先例を補

---

Bologna, 26 marzo 2013.

- 6) S. Ooguro (in collaboration with Naoko Nishimoto), "Pawnbroker as a Theft-Watcher: *Shichiya* in Early Modern Osaka", Session 20079 (At the Origins of Consumer Credit: Pawnbroking in Pre-industrial and Developing Societies. Economic Concerns and Moral Connotations); Mauro Carboni, "The Civic Model of Italian Public Pawnshops. An Ethical Approach to Consumer Credit", XVII World Economic History Congress, Kyoto, 3-7 agosto 2015.
- 7) M. G. Muzzarelli, *Pescatori di uomini. Predicatori e piazze alla fine del Medioevo*, il Mulino, Bologna, 2005.
- 8) *From Words to Deeds: The Effectiveness of Preaching in the Late Middle Ages*, edited by M. G. Muzzarelli, Brepols, Turnhout, 2014.

足し、さらに新しい世代——実際のところは、星野先生を第一世代と考えると、第三世代となりますが——がやって来て、ボローニャ大学と大阪の大学の関係を維持、そして進展させたわけです。ボローニャ大学の古文書学・中世学科は、若手研究者のために大阪市立大学やビーレフェルト大学、パリ大学の推進する「頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム」に参加し、ポストクたちの研究を受け入れています。これはたいへん好ましいことであり、将来的には中世研究者のみならず、イタリアと日本の若手研究者のあいだの関係をいっそう深めることにもなるでしょう。

星野先生がボローニャと日本の友人たちとのあいだのキーパーソンのひとりであったとすると、もうひとりにはジョヴァンニ・ペテルノッリ先生だと言えるでしょう。先生は美術史家ですので、中世学にも造詣が深いのですが、彼のおかげで、京都大学から新たな研究者がボローニャに来てくれました。30年以上前に山辺規子さんがこの街を訪れたのは、支配者層に関心があったためであり、また『ある大封建諸侯家系の起源——カノッサのアダルベルト=アットー』の著者ヴィート・フマガッリ先生の知遇を得るためだったということです<sup>9)</sup>。山辺さんはノルマン王国も研究対象としていましたが、カノッサのテーマはフマガッリ先生、そしてその教え子で、この分野に詳しいロッセッラ・リナルディとのあいだを取り持ってくれました。さらに彼女は先生を介して、30年以上前から食物史研究のパイオニアとして有名なマッシモ・モンタナリーと知り合い、彼の著書を邦訳することにもなりました<sup>10)</sup>。

さらに山辺さんは女性史にも強い関心をもっていたことから、また新た

---

9) Vito Fumagalli, *Le origini di una grande dinastia feudale. Adalberto-Atto di Canossa*, De Gruyter, Berlin, 1971.

10) Massimo Montanari, *La fame e l'abbondanza*, Laterza, Roma-Bari, 1993 (マッシモ・モンタナリー『ヨーロッパの食文化』山辺規子・城戸照子訳、平凡社、1999年).

な縁が生まれました。イタリア女性史家協会は、1990年代に女性問題に関する歴史的・哲学的・社会的なテーマを扱った『アジェンダ』という雑誌を刊行していましたが、イタリア以外、それも非ヨーロッパ圏での研究状況への関心が高まったことから、1997年の第19号に、高田京比子さん、高橋友子さん、尾本倫子さん、そして山辺さん共著の論考「日本女性史」を掲載しています<sup>11)</sup>。山辺さんは他の女性研究者と協力し、日本の活発な歴史記述の仕事をまとめてくれました。この女性史という分野は、イタリア等と同様、日本でも1970年代以降、学術界で注目され、1980年代に飛躍的に発展しました。「ジェンダー」という概念の導入と学際性は、1990年代の学問を特徴づけ、イタリアと日本の女性研究者たちのように、地理的には互いに離れている人びとの関心や観点を近づけてくれたのです。この寄稿は、これまであまり知られていなかった問題における日本の研究の実態を知りたいという期待に応えるものでした。論考の著者の一人で、今は亡き高橋友子さんは、フィレンツェの子どもと捨て子の研究の第一人者でしたが<sup>12)</sup>、同じテーマを扱うポーロニャの研究者たちとも交流があり、「社会史」担当のクラウディア・パンチーノとの繋がりもありました。引き続き女性史に対する関心は高く、そのために私は日本、特に奈良女子大学で、女性と食物との関わりというテーマで講演することになったのです。したがってこの30年で縁は深まり、互いに関心をもち、協力し合う分野はさらに広がって、経済史から社会史、女性史、またこれからお話しするように、まさしく中世に誕生した服飾史へと拡大していきました。山辺さんの尽力で、私は女性と食物との関わり——ここ15年間、しばしば

11) Keiko Takada, Tomoko Takahashi, Noriko Onomoto, Noriko Yamabe, "La storia delle donne in Giappone", *Agenda. Bollettino della Società italiana delle storiche*, n.19, 1997, pp.8-17. この論稿執筆にあたっては、総合女性史研究会代表である脇田晴子氏の協力があった。

12) T. Takahashi, *Il rinascimento dei trovatelli: il brefotrofio, la città e le campagne nella Toscana del XV secolo*, Edizioni di letteratura, Roma, 2003 (高橋友子『捨て児たちのルネッサンス——15世紀イタリアの捨て児養育院と都市・農村』名古屋大学出版会、2000年)。

このテーマに立ち返っているのですが——について<sup>13)</sup>、そして東京大学の村松真理子さんのおかげで、クリスティーヌ・ド・ピザンという、ポーロニヤ人を父にもつ最初の女性知識人の生涯を、日本でお話しすることができました<sup>14)</sup>。数年前から村松さんとはコラボレーションを企画しており、今朝方、東京大学とポーロニヤ大学の博士課程の学生たちの会合が開かれたところですが（去年は、今年とは違うかたちでおこなっています）。

私の『フランス宮廷のイタリア女性——「文化人」クリスティーヌ・ド・ピザン』の日本語訳が出版された2010年には、私は東京のイタリア文化会館、キャンパスプラザ京都、そして東京大学で、クリスティーヌ・ド・ピザンについて講演しています<sup>15)</sup>。そこでは14世紀に生きたひとりの女性が苦しんだ疎外感、さらに彼女——クリスティーナ・ダ・ピッツァーノが己の活躍の場で上げた成果を述べました。これはイタリアと日本のあいだの距離を縮めることになり、進行中のコラボレーションにおいて、女性史のみならず、文化史の別のテーマに達することができました。したがってこれがもうひとつの縁だと言えます。

この本を国際基督教大学の伊藤亜紀さんが日本語訳してくれたことにより、新たなテーマ、そして新たな世代との出会いがありました。そのテーマとは、すでにお話しした服飾史ですが、これは中世に起源があり、

- 
- 13) マリア・ジュゼッピーナ・ムツァレリ「中世・近世ヨーロッパにおける女性観と食物——歴史における一つの関係論」山辺規子訳、『家学政研究』Vol.49、No.2、2003年、123-131頁。
  - 14) M. G. ムツァレリ「クリスティーヌ・ド・ピザン——最初の女性知識人」村松真理子訳、『旅 テキストへ／テキストから——文学・哲学・歴史をめぐる現代イタリア・地中海からの発信』UTCPブックレット22、2012年、103-116頁。
  - 15) M. G. Muzzarelli, *Un'italiana alla corte di Francia. Christine de Pizan, intellettuale e donna*, il Mulino, Bologna, 2007 (M. G. ムツァレリ『フランス宮廷のイタリア女性——「文化人」クリスティーヌ・ド・ピザン』伊藤亜紀訳、知泉書館、2010年); 「クリスティーヌ・ド・ピザン——イタリアからフランス、そして日本へ」山崎彩訳、『西洋服飾の史的事象によるジェンダー論』2008～2010年度文部科学省委託服飾文化共同研究拠点事業報告、2011年、75-92頁。

往々にして中世の記憶を保持しています。伊藤さんは2014年に『イタリア・モード小史』も訳し<sup>16)</sup>、私と彼女はクリスティーヌだけでなく、モードについても関心を共有しています(1998年に彼女は「ウェヌスの紫衣」というイタリア語論文を出しており<sup>17)</sup>、近年ではクリスティーヌの「制服(ディヴィーザ)」、すなわち彼女に特徴的な青い服についての論考も書いています<sup>18)</sup>)。色彩象徴論と14-16世紀イタリア服飾史を専門とする伊藤さんは、先日『青を着る人びと』を上梓しましたが<sup>19)</sup>、これがイタリア語に訳されることを願っています。

最近、本学ではラウラ・ディミトリオが歴史学の博士号をとりました。彼女は近代初期、もしくはマルコ・ポーロの時代——したがって再度中世史に戻ることにありますが——から現代までのイタリア・モードにおける日本の影響というテーマに取り組みました。ラウラは今回のシンポジウムの準備を手伝ってくれたのですが、今日は仕事のためにここに来られません。しかし彼女は、今後もイタリアと日本の研究者たちの架け橋となってくれることでしょう。先日も伊藤さんの協力のもと、彼女は東京で研究発表をしたところ<sup>20)</sup>です。

このような話からもおわかりのとおり、私たちの共通のテーマは、新旧取り混ぜて多岐にわたっています。私が自分のことを語り終えても、対話の中心人物となる方はたくさんいらっしゃいます。こういった人びとのな

---

16) M. G. Muzzarelli, *Breve storia della moda in Italia*, Il Mulino, Bologna, 2011 (マリア・ジュゼッピーナ・ムッツァレリ『イタリア・モード小史』伊藤亜紀・山崎彩・田口かおり・河田淳訳、知泉書館、2014年)。

17) Aki Ito, “Il vestito porporino di Venere—Il significato del color porpora per il Boccaccio”, *Studi sul Rinascimento*, vol.5, 1998, pp.41-59.

18) A. Ito, “Io che sono vestita di blu—L’espressione di sé nel modo di vestire della scrittrice Christine de Pizan”, 『西洋服飾の史的事象によるジェンダー論』2008～2010年度文部科学省委託服飾文化共同研究拠点事業報告、2011年、4-26頁。

19) 伊藤亜紀『青を着る人びと』東信堂、2016年。

20) Laura Dimitrio, “Giapponismo e neo-giapponismo nella moda italiana”, お茶の水女子大学、2016年10月21日。



かには、若い方もいます。彼らが一連の知識や討論の過程、テーマを思い出させてくれるのは、私にとっては好ましいことです。そしてこういうことをするのは、なにかを祝うためではなく、物事の成り行きを記憶にとどめるため、この協力関係を、ヨーロッパやイタリアの中世を扱うイタリア人や日本人研究者の関わりという、より一般的な枠組みにおさめるため、そして草創期から将来の発展した状態を思い描くためなのです。

ここまでお話しした人間関係の特性は、経済倫理史や女性史、食物史、総合的な言い方をすれば、社会史や心性史と結びつくものであることがわかりいただけるでしょう。経済史や星野先生の貢献が絶対的なものだというわけではありませんが、すべてはそこから始まりました。この特性のおかげで、研究者同士が知り合い、論考が書かれ、翻訳が出版され、さまざまなイニシアチブが生まれて、イタリア人と日本人との関係は強固なものとなったのです。大切なのは、私たちがこの関心を維持し、発展させ、中世の文化と食料供給の中心にいる多くの若者たちに引き継がせることです。ボローニャ大学は世界最古の大学であり、食物と関わりをもっています。というのもボローニャの街は、大学が要求するだけの食料を生産しなければならず、この分野での人脈と経験のネットワークをつくりあげることができたからです。こうして食物は、街を特徴づけるものとなりました。私たちは文化や食物、そして女性の中世についても話してきました。傑出した女性クリスティーヌ・ド・ピザンの父は、まさにこのボローニャ大学で教鞭をとり、その知識がここに息づいています。

日伊国交樹立150周年にあたり、ボローニャ大学、特に本学の中世研究者が日本の仲間たちとともに3、40年かけて創りあげ、維持し、そして活性化した関係の歴史を再構成しなければならないと私は考えています。彼らは、互いの繋がりができた当初や、他大学——例えばミラノ大学、それもジョルジョ・キットリーニ先生の周辺——で扱われているのとは異なるテーマに興味をもっています。この関わりから、イタリアでも日本でも、歴史的な好奇心が、生活や風俗、コミュニケーション、モードへと広がっ

ていきました。しかし私たちがすべきことはまだ残されており、さらに多く、そしてよりよく、他のテーマや世代、街を取り入れていかなければならないのです。日本人研究者にとっては、ポローニャはここ3、40年のあいだに、いわば「発見」された街です。中世は遥か昔ではありますが、多くの成果をあげている研究者たちが一堂に会する機会を与えてくれました。今回の討論の折に、新しいイニシアチブが誕生することを、私は期待しています。